

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第二部

第十章

Hiro's summer - 2

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

10・Hiro's summer-2

136.

137.

138.

139.

140.

141.

142.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
間宮 ひろ	日本の高校生 陸上部所属
河合 ヤスオ	ひろの同級生 陸上部マネージャー
それ	魔物

10・Hiro's summer-2

136.

それの笑い方はなぜかフルートの低音符の一定の連なりを思わせた。音は心地よい。だが……

《おまえが知りたいのはもっと別のことだろう》

おまえの考えていることはすべてお見通しだ、といった口ぶりだ。どこか金属的な響きがある。

《おまえが知りたいのは、桧山 健のことだ。——ふふ……凶星か？》

深いところにトゲがあるような、不思議な波動。

《ふふ……ふふふふふ……》

それは笑いながらなにか探していた。話の糸口だ。どこから切り込もうか……

あなたはなにを知っているの？

なんとなく戦慄をおぼえながらひろはそう考えた。

《なにを、だと？ ふふ……ふふふふふ……》

……

《なにもかも。桧山 健に関することは、今現在のことも、かつてのことも、なにもかも調べ上げてある。いや、私は知っている。たとえば、彼がかつて行った、あの……》

待って！

と、ひろは静止した。激しく静止した。

私は……聞かない！

それはあごを引きつけた上目遣いの表情で、ひろの背後から、彼女を凝視した。

ひろは考えた。

ななこの話は、そりゃあ、さいしょはなにかと思ったわよ、この娘(こ)、どうかしてるんじゃないかしら、って。でもふしぎと、聞く気になれたわ。

なぜかしら……ななこに無くて、こいつに有るもの……よこしまな感じ？ そうだわ、ななこにはこいつみたいにイヤな感じが、ぜんぜんなかった！

137.

このひとはとても冷たい、とひろは思った。なにか、有機的に冷たいといおうか、機械ともちがう、生きているのにあたたかみを感じないといおうか。

《さぞかしおまえは、あたたかい人間なのだろうな》それは冷笑の波動とともに言った。

なによ！ とひろは反発をおぼえた。桧山さんのこと聞かせてくれなんて、だれも頼んでいないわよ！

《そうはいつでも、ふふふふふふ……聞きたいのだろう？》

聞きたくないわ！！

《しかしおまえは知りたがっていた》

ひろは言葉を選ばずに反射的に言った。

知りたいわ。でも彼に悪意を持っている人の話は聞きたくない！

《——悪意だと？》

それは含みのある声で言い、含みのある波動を送ってきた。ひろは思わずぞくっとして、振り向こうとした。それの波動はいつも背後から送られてくる。

「間宮！！」いきなり怒声がとんできた。

「はっ！」

すぐ脇をとなりのレーンで練習中のチームメイトが走りぬけた。もう少しで接触するところだった！

「ぼけっとするな！ なにやってるんだ！！」陸上部顧問の教師が真っ赤になって怒鳴っている。

怒って当然だ、ひろも隣レーンの選手も二週間後のインターハイにむけて最後の仕上げに入っているところだった。不注意のケガなど「ごめん」で済むものではない。

「おまえちょっと休憩しろ、なんか顔色わるいぞ」

顧問教師はそれだけいうとほかの選手のところへ行ってしまった。

水場で顔を洗い、木陰で水分を補給しても休んだ気がしない。それが話しかけてくる。
《——悪意などなくても、罪は犯せる》

なんなのよ、また思わせぶりなことを！

《どうせ話し相手がないのだ、時間は有効に使おう。まあ聞くがいい。——かつて》

また “かつて、？

《ひとつの大陸が滅びた。爆弾が使われたのだ。あらゆる生き物を死滅させる力を持った爆弾が。桧山 健はその爆弾を造った勢力の生き残りだ》

138.

グラウンドで河合が部員に集合をかけている。ミーティングをやろうというのだ。
それの話は気になったがひとりで休憩しているわけにもいかない。ひろは黙って立ち上がりその場を離れた。しかし それの気配は執拗に追ってくる。

《間宮 ひろ、おまえにはまた別の罪がある》

ひろはぎょっと立ちすくんだ。

ふふふふふふ……

それは歌うように笑い、どこかへ去っていった。

*

河合マネはひろの変化に目ざとかった。

今日は一緒に帰ろうという彼の誘いをさすがに断れない。電車で降りる駅が同じなのだ。つい一昨日までひろは絶好調だった。短距離のエースで、四百メートルリレーにもエントリーしているひろのとつぜんの変調は出場選手全員の士気に影響しないわけがない。河合はとにかく面白おかしい話題を持ち出してひろを笑わせようとしたが、ひろは愛想笑いで応えるのに精一杯で、かえって沈潜気味の印象を河合に持たせてしまうことになった。

河合はなんでも話してくれという。「前からいってるじゃねえか！ おめえの心配ごとはおれがぜんぶ引き受ける、ってよ！」

「ごめん、河合くん」ひろはそういうしかない。

「なんでもねえなんていったっておれには通用しねえからな！ 練習のせいとかじゃねえんだろ、なんかこう、めんたるなもんだ、ちがうか！？」

ひろは思わず顔をあげて河合の顔を見てしまった。なんでわかるんだろ——

彼はなんでもわかっている。ひろが彼の夢なのだろうと何だろうと、心から心配しているのが痛いほどよく伝わってくるのだ。

もしかしたら、私、河合くんと結婚したら幸せかもしれない、とひろはふと思った。

遠くにいて会うのもままならなくて、よく知り合っているわけでもない松山さんの求婚を受けるよりも——

私のこと、私以上にわかって気を使ってくれる河合くんの方が——

それは魔が差した瞬間だったかもしれない。乗降客がいなくなったホームの真ん中、なにごとか物言いたそうな視線を向けてくるひろの上腕を河合はぐとつかんだ。

「ひろ！ おれ——！」

ふふふふふ……と風のような含み笑い。

同時にひろの通学リュックのポケットで携帯電話の着信が鳴った。

139.

腕をつかみ、つかまれた体勢で河合マネとひろは間近に見合った。河合はそう上背があるほうではなく、身長はひろとさほどかわらない。互いの鼻先がふれあいそうな近さで見合ってしまう、ひろは思わずあごを引いて目をぎゅっと閉じた。

電車が出て行ったあとのホームに生あたたかく湿った風が吹いてきて、ひろの制服のスカートの裾をなぶった。

「い、いいいいいいやっつ、そのっ！！ ケイタイ鳴ってるぜっっ！！」

河合はひろの腕から放した手をあたふたと振り回した。

携帯電話の着信は間宮宮司、ひろの父だった。今の電車で帰ってきたのではなかったのかというメール。ひろの帰りを駅で待っていたらしい。

ひろの胸はどきどきと鳴り、足から力が抜ける思いだった。着信音でとっさに桧山のことが頭をかすめたのだ。音が鳴らなければ……河合くん……

宮司は駅の駐車場にいた。ひろをみつけると「お～い」と手を振った。その姿にひろはひどくほっとした。

「河合くん、ごめん。あしたの朝連はちゃんとでるから」ひろはあいまいにそう言って父のところへ走った。

父がこんな時間に駅で待っているなんて初めてのことだ。どうしたのかと尋ねると「いやー、もうヤマ場なんだろう？ 景気づけにひとつ晩飯でもと思ってさ」とぼけた顔で河合マネに目礼しながら言った。

新城社長が手回しよく いきつけのうなぎ屋に予約を二人分いれてあって、ひろは「やった！」と目を輝かせた。

うなぎの香ばしい香りに身も心も癒されて満腹のネコのようにほっこりしている娘をみて宮司は「はっはっは」と笑う。「おまえはやっぱりなんとかより食い気のヤツだ！」

ひろは「はあ」と幸せなため息をつく。「おいしかったよー、お父さん。死にそうなくらいおなか空いてたのよ、ホントにいいところに来てくれたわ、まるで救世主さまよー」

「ははは。救世主さまかー。……母さんもいろいろ心配しててな、そうそううちも空けられんし、ちょっと様子を見てきてくれと」

食事のあとは湖岸公園を散歩だ。いつものように観光客たちがそれぞれ夕涼みの時間を楽しんでいる。ここには心配事も悩み事もない。広々とした空間がなにもかも開放してくれる。今夜は湖の上に月が出ていて風情があった。

「うん、なんだかんだあるけど……あたしはほんとに走るだけなの」

「まあ、食べるうちは大丈夫さ」気持ちよさそうに笑っている父に、ひろは、「じつはねえ……」ぼつぼつと話出す。

それのことを打ち明けられるのは父のほかにはいない。間宮宮司は黙って聞いていたが、聞き終わるとひとこと感想を述べた。

「またおかしなのがあらわれたな」

「……うん……おかしなことばかり言うのよ、それもあたしの知ってる人のことをあれこれとね」

「……それでおまえは乱調気味というわけか」

「……うん」

「うーむ……それはおまえ、それが目的かもしれんぞ」

「は……??」

「あれこれ気になることを並べ立てて、気持ちを乱れさせてるんじゃないか?? ほれ、試験の前や試合の前の精神を集中しなくちゃならん時に、急に不安になったりする。そういう時はだな、心に波風たてるようなつまらんことを吹き込んでくるヤな輩がいるのさ、きっとそういう手合いだ」

「そうかな……」

「だって、おまえ。今現在のおまえに、かつての他人の姿が……おまえ自身にしろ、楡山くんにしる……いったいなんの関係があるんだ？」

「……」

「おまえにとって意味があって、価値があるのは、この世で十七年かけて培ってきたものだけだ。違うかね？」

「……ううん、違わない。違わないけど……ねえ、お父さん、転生……って本当にあると思う？」

「……生まれ変わりか？ よしんばあったとしても、だな、それは今の人生の勘定には入らん。なあ、ひろや、インターハイ目前のこの時期にそういうことを考えている事自体、おかしいと思わんか？」

「……そう、だよね……」

「落ち着いてよく考えてごらん、今やるべきことを。おまえにできることはいくつもないはずだ。その中で最善を尽くす。それだけじゃないかね」

「ええ……」

「しかしよくもまあ、いつてくれたものだな、それは。よほど人心を揺さぶることに長けているとみた。知能犯だな」

「のんきなこと言わないでよ……」

「はは、まあ、人の弱みにつけこむにも技術やセンスがいるものさ。……おまえがいちばん気になるのは楡山君のことなんだろう？」

「……」

「娘や、どうしても彼のことが知りたいのなら、一生かけて知り合うという手もあるぞ」

140.

新城マンションの自分の部屋に戻るなり、電話が鳴り出してひろはびくっととび上がった。父は先刻帰ったところだし、誰？ と思わず時計に目をやって、もしや……と、震える手で携帯電話を開いた。相手は昼間の練習中にひろの不注意を叱責した声、部の顧問教師で、ひろは思わずその場にへたりこんだ。

父親と食事をして悩みもきいてもらっていた、と話す顧問教師は「そうかー」と、いづらか安堵の混じった声をあげた。ひろの変調を心配して何度か電話したらしい。父とゆっくり話したくて、ずっとマナーモードにしてあったのだった。

インターハイ開会までもう日がない、とにかく集中しろよ、といって電話は切れた。ひろの高校の陸上部インターハイ出場は何年ぶりかのことで、関係者たちは期待と心配で安眠できない日々をすごしていた。

今までただ走ることに夢中でまるで気にしていなかったが、インターハイは参加選手だけで三万人もの人数が集まる規模の大会なのだ。今になってさすがにプレッシャーがかかってくるのを感じる。

どれだけのライバルたちと競い合おうと、どれだけの期待をかけられよう——

たとえば、世界中の期待を背負ったとしても、走るのはおまえだと、父、間宮宮司は言った。いや、父だけではない、河合も、そして それもおなじことを言った。

もちろん走る。全国大会の決勝を、だれよりも早く。誰のためでもない、このからだかそう望むから。

入浴して練習の疲れを洗い流し、締め切ってあったカーテンと窓を開けた。

晴れた夜空に上弦の月。

夜の大気はすっきりと澄んでいて涼しい風が部屋に流れ込んでくる。

それでも……と、携帯電話をもういちど開いて着信履歴を確かめてみるが、陸上部顧問以外のは見当たらない。

インターハイが終わるまでは連絡しないという言葉、桧山はちゃんと守っているわけだ。嬉しいのか淋しいのか、どっちだかわからない涙がにじんできく。

洗い立てのパジャマに着替えて月光が射し込む窓辺のベッドに横になる。
彼も同じ月を見ているのかしら……

もちろん、と声が聞こえた気がした。いい月夜だ。おやすみ。

ええ——

おやすみなさい——

141.

「あのさあ、ひろ……」

河合はひどく気まずそうにいつてきた。誰もいない駅のホームでひろの腕をつかんでしまったことを気に病んでいるのだった。

「おれ、おめえのためなら何だってできるんだ、って、そういうつもりだったんだ。おれは運動神経からっきしだし、体格だってでかくねえ、スポーツなんかぜんぜん縁のねえ人間だと思ってたんだ。けど、高校入っておめえの走りを見たときにさ、こう、体中にびびっときたんだ。ほんとに電気が走ったみてえ、あんなのは初めてだった。おれはこいつの走りにホレたと思った」

ひろは脚のストレッチを休めずに河合をみあげた。

「それからさ、考えたのさ、おれにも何かできるはずだって。それでいろいろ勉強した。アスリートの体の管理に何が必要とか、調整方法とか、競技中の支援とか、トレーニング方法とか、まあいろいろとさ。学校の勉強なんかそっちのけだったから、成績はぼろぼろだけどな」

彼は、へへっと涙をすすりあげた。「けど、そういうするうちに仲間ができた。去年の秋にマネージャーが何人も増えただろ？」

いわれてみるとそうだ、陸上部には今マネージャーが五人いる。ひろは、いつの間にか増えた、と思っていた程度だったのだが。

「秋冬かけてみんなで猛勉強したんだ。とにかくおめえがダントツに調子よかったからな、ほかの部員もおめえにひっぱられるようにして調子をあげてきた、これはぜったいにいける、と思った。今乗らなきゃあ、ウソだと思った。マネージャーチーム全員がな。どうだったい？ おれらが組んだメニューは？ 冬場からのトレーニングはばっちり効果が出ただろ？」

ストレッチの動きがいつのまにかとまっていた。ひろは深くうなずいていた。

「早く走れるやつはいっぱいいるけどさ、おれの仲間はみんな、おめえの走りが好きだっていつてる。なんていうかな、おめえが走っているとみると、なんかこう、わくわくする、無性に胸ん中をかきたてられるのさ。おめえの走りは力をくれるんだ」

「河合くん——」

「だからおれたちはうちの高校から全国大会の舞台に出て行く選手全員を……おれは、おれはおめえを……力をふりしぼってサポートしてえ……ってことをいいたかったんだ。——わかったな、練習のじゃまして」

河合くん、とひろはマネージャーを呼び止めた。そして「ありがとう」と言う。「私……がんばる。もうこれが最後なもの」

——誰のためでもない。私自身のために

ひろにしてみれば、それは言葉どおりの意味だった。

142.

気の遠くなる練習を繰り返しても、結果というものは一瞬ででてしまう。百メートルの短距離走(スプリント)の場合はわずか十数秒。インターハイでは最終的な決勝戦を含めて走るのは三回、のべ三十秒そこそこで最も速いスプリンターが決まるのだ。

ホームストレートの百メートル走スタート地点についても、ひろは緊張するどころか、負ける気がしなかった。河合のセリフではないが、負けたら「ウソだ」と、これで負けたらもうなんにも信じられない、と思った。

予選、準決勝と、とんととこなしてタイムは縮まる一方。陸上部顧問教師はひろのあまりの調子よさに逆に青くなる始末だ。

あの二、三日間の不調はいったいなんだったんだ、俺の不眠時間返せとこっそり文句をつぶやきつつ、彼の脳裏には、はや、さまざまな杯だの盾だの旗だのが去来するのだった。

*

そしてその日の昼前には、ひろは自己ベスト、大会記録をそれぞれ更新して女子百メートルの決勝の勝者となったのだ。

結果が出たのが陸上競技日程の中でも割合早い方だったので、チームの士気がおおいに盛り上がったのはいうまでもない。

*

間宮宮司は大きな安堵の息をついて観客席を立った。一週間ほど前にひろと一緒に食事した頃より、だいぶ頬がこけてみえる。

それもそのはず、宮司はあれ以来、ひろのまわりを妙なものがうろちょろしないよう、朝晩、斎戒沐浴(さいかいもくよく)をおこなって礼拝に励んでいたのだった。飲食を慎んで身を清めるのはいいが、梅雨明け後の炎天下を動き回るのはちと無謀だったかと思う。気は張っているが、少々めまいがする。

スタンドの日陰から陽光の下に出てパナマ帽をかぶり直そうとしたとたん、するどい光が目に飛び込んできて目がくらみ、足がもつれた。

あ、こりやまずい、倒れる、ととっさに考えた。倒れかかるからだをなにかでささえようと夢中で手をさまよわせる。

すると誰かがその手をとった。右横から伸びてきた手が、がしっと肘を支え、もう片方の手が左側の脇を抱えてくれた。

あやうく通路の階段を転げ落ちるところだった。どっと冷や汗が噴き出して「どうも……」と口ごもった。

支えの手を差し伸べた相手はそろそろと宮司を助け起こし、通行人の邪魔にならない場所までゆっくり移動した。相手のジーンズとスニーカーがちらりと見えた。上背のある若い男で、宮司は彼の社を取り囲む針葉樹の林に足を踏み入れたような錯覚を覚えた。松の匂いだ。

「大丈夫ですか、宮司？」

「——きみか、松山くん——」

間宮宮司はなかなか回復しなかった。動悸が激しく、呼吸も速い。娘ほどではないが体力と健康には自信があったのだが、それもぐらつく思いだ。

スタジアムはどこも人でいっぱいでも一息つける場所はなく、松山は考えたあげく、医務室を借りられないかとスタジアムにかけあった。

急病で通路で動けなくなっていた人を連れてきた、自分は通りすがりの者で、お互いに困っているのだと切実な態度とまなざしを駆使して訴えると、係員はエアコンの効いた部屋に入れてくれた。

そうこうするうちに、彼らはひろの四百ハルリレーの予選を見逃してしまったのである。

10・「Hiro's summer-2」

11・「Hiro's summer-3」へ続く

奥付

リ・コンストラクション

第十章 Hiro's summer-2

2025年 4月5日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社